

# 障害のなかで生きること —「障害があることは不幸」なのか

2019

2/16 SAT 13:30-16:30

入場無料・事前申込不要

## TKPガーデンシティ京都

〒600-8216 京都府京都市下京区烏丸通七条下ル東塩小路町721-1 京都タワーホテル 2F/7F

有馬 斉 (横浜市立大学)

機能障害者の生活満足度調査の結果から分かること

大谷 いづみ (立命館大学)

「問い書き対話するいとなみ」と「障害をもつ女性」という経験

土屋 貴志 (大阪市立大学)

後遺障害者?として考えていること

野崎 泰伸 (天理医療大学)

「障害があることを不幸にしない」経済システムとは何か



- JR山陰本線 京都駅 徒歩2分
- JR東海道新幹線 京都駅 徒歩2分
- JR奈良線 京都駅 徒歩2分
- JR東海道本線 京都駅 徒歩2分
- JR湖西線 京都駅 徒歩2分
- 近鉄京都線 京都駅 徒歩2分
- 京都市営地下鉄 烏丸線 京都駅 徒歩2分

主催団体: 日本医学哲学・倫理学会

実施責任者: 霜田求 (京都女子大学)・堀田義太郎 (東京理科大学)

連絡: yoshitaro.hotta@gmail.com

※本公開講座は平成30年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)の助成を受けて行われます。

<https://www.kashikaigishitsu.net/facilities/gc-kyoto/access/>



## 公開講座の開催にあたって

これまで、医療や生命に関わる倫理的な議論のなかで、「障害」は隠れた主役となってきました。出生前診断・選択的中絶、受精卵診断等では、障害の有無が中絶や受精卵の選別を擁護する理由になるか否かが問題になります。尊厳死・安楽死や脳死臓器移植では、ある種の能力を欠くことがその患者を死なせることを正当化するのかが問われています。

これらの背景には、「障害があることは不幸である」という見方があります。このような見方は、これまで様々な仕方で批判されていますが、依然として、医学・医療関係者、生命倫理学に関わる人々も含めて多くの人々に共有されています。

本公開講座では、あらためて「障害のなかで生きること——「障害があることは不幸」なのか」というテーマを設定し、様々な角度から議論することを通して、皆様とともに考えていきたいと思えます。

## 講演の概要

有馬 齊 (横浜市立大学大学院都市社会文化研究科准教授)

### 機能障害者の生活満足度調査の結果から分かること

過去に実施されてきた調査研究の多くは、機能障害者の生活満足度(QOL)が、機能障害のない人と比べてあまり変わらないほど高いことをあきらかにしてきた。

主な調査の結果を概観し、その意義について考察したい。

---

大谷 いづみ (立命館大学産業社会学部現代社会学科教授)

### 「問い書き対話するいとなみ」と「障害をもつ女性」という経験

「障害を持つ女性」という経験は生命倫理学と出会うずっと以前からその問題群に自らを向かわせ、これを他者に問いかけ対話するなりわいは必然となった。「当事者」とは誰か、その距離をどう置くか、演者・フロアとともに考えたい。

---

土屋 貴志 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授)

### 後遺障害者？として考えていること

2016年春に延髄梗塞を発症し、後遺症が軽くならず、脱力や痺れや痛みがある。「障害」ができてまだ2年10か月あまりしか経っていない「初心者」だが、ままならない体で生活しながら考えたことをまとめたい。

---

野崎 泰伸 (天理医療大学医療学部非常勤講師)

### 「障害があることを不幸にしない」経済システムとは何か

「障害があることは不幸である」とする価値観は、ひとつの価値観でしかない。その価値観を助長させ、さらに再生産させるものは何か。こうした一連の流れを社会制度ととらえ、とりわけ経済体制を取り上げて考えてみたい。